様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １５ 日現在

機関番号：３７１０５
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2011～2014
課題番号：２３７２００３８

研究課題名（和文）翻訳の思想とその現代性：２０世紀フランス・ドイツにおける思弁的翻訳論の横断的研究

研究課題名（英文）Speculative Translation and its Actuality: an interdisciplinary Study on Philosophy of Translation in the 20th Century France and Germany

研究代表者
西山　達也（NISHIYAMA, Tatsuya）

西南学院大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：４０５９９９１６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、20世紀ドイツ・フランスの思想家たち、とりわけマルティン・ハイデガー、モーリス・ブランショ、エマニュエル・レヴィナスがいかにして翻訳の実践を通じて《翻訳の思想》を展開したかを検討するとともに、これらの思想家による翻訳実践がいかなる言語哲学に立脚していたかを調査した。本研究はまた、20世紀の思弁的翻訳論が一方で近代文献学の展開と、他方で歴史哲学の諸潮流から不可分のものであることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research aims at examining how French and German thinkers from the second half of the twentieth century, such as Martin Heidegger, Maurice Blanchot or Emanuel Levinas, developed their speculative philosophy of translation through praxis of translating, based essentially on the philosophy of language. This research also makes explicit to what extent such a theoria is inseparable from the development of modern philology and the twentieth century's tendencies of the philosophy of History.

研究分野：哲学・倫理学・西洋思想史

キーワード：翻訳の思想　比較思想史　ハイデガー　ブランショ　レヴィナス　ドイツ哲学　フランス哲学

１．研究開始当初の背景

言語活動を通じた思考の変形可能性に対して、思考がいかなる意義を見出しうるか――これが本研究の出発点となる根本的な問いである。哲学は、先行するテクストや概念を伝承するにあたって、たえず翻訳を遂行し、ときには既存の翻訳を批判し、新たな翻訳を提示することで、思考の体系そのものに変革を生じさせてきた。20 世紀においては、様々な思想潮流に共通して翻訳をめぐる思弁が展開したが、こうした思想変革の可能性を洞察した哲学者の一人であるマルティン・ハイデガー（1889-1976）は、思考そのものを生成させ変革する翻訳作用を「思弁的翻訳」（denkende Übersetzung）と呼び、その可能性を探究した（「思弁的翻訳」の実践と不即不離の関係にあるこのような思想を、以下では「翻訳の思想」と略記する）。

当該研究者は、ハイデガーにおける「翻訳の思想」を中心に研究を継続するとともに、並行して、ドイツとフランスの思想交流を背景とするハイデガー思想のフランスにおける受容、とりわけ哲学・文学・芸術・人文社会科学の諸領域に与えた影響関係をめぐる研究に従事してきた。このような経緯から、本研究ではハイデガーにおける「翻訳の思想」を起点として、20 世紀フランス・ドイツにおいて「翻訳の思想」を展開した一群の思想家の翻訳めぐる理論および実践がいかなる意義を持つものであったのかを解明することを試みた。

２．研究の目的

本研究においては 19 世紀より萌芽的に形成され、20 世紀に多様な展開を見せたドイツ・フランスにおける「翻訳の思想」の諸相と、その現代性を明らかにする。翻訳をめぐる問いは、哲学および思想史を動態としてとらえる際に避けて通ることのできない問いであるにもかかわらず、これまで哲学研究において副次的な領域と見なされてきた。本研究は、受容行為がもたらす思想変革の可能性を「翻訳」という観点から積極的に考察することを目指す。

３．研究の方法

本研究は、（１）ハイデガー思想の研究を起点としつつ、（２）20 世紀という時代における翻訳をめぐる諸思想を、（３）とりわけフランス・ドイツという二つの文脈を横断しながら検証した。

ドイツの思想家としてはハイデガー、フランスの思想家としては、ジョルジュ・バタイユ、モーリス・ブランショ、エマニュエル・レヴィナスを中心に調査を進めた。フランス・ドイツという枠を暫定的に設定するものの、最終的には国民国家の言語の枠を横断することで、「翻訳の思想」という事象にアプローチするのに適した思想史記述の在り方を模索した。

ところで、20 世紀における「翻訳の思想」の母胎として、19 世紀以来の文献学および言語理論の進展が果たした決定的な役割は無視しがたい。本研究は、哲学、文学、批評、文献学、言語学といった多様な知が交差する領域に着目し、そうした領域において「翻訳」に関する思弁がいかなる形で展開するかを析出するという方法を採用した。

成果の公開方法としては、学会におけるワークショップおよび国際シンポジウムで発表をおこない、また、国内外の研究者を招聘しワークショップを開催した。また、本研究の総括として、古代哲学・解釈学・現象学を専門とするアメリカの哲学者ジョン・サリスの著作（John Sallis, *On Translation*, 2002）を翻訳・解説することを通じ、本研究をより広い文脈に位置づけ直した。

４．研究成果

研究成果は以下の４点にまとめられる。

（A）翻訳の思想と歴史哲学的前提

本研究においては、まず、20 世紀フランス・ドイツにおける「翻訳の思想」を概観するための手始めとして、哲学がみずからの内部に「翻訳」をめぐるテオリアとプラクシスをどのように位置づけうるか、すなわち「翻訳」というプラクシスが有する思想変革の可能性を、歴史性という観点からどのように積極的に位置づけうるかを確認した。具体的には、ハイデガーの哲学における「翻訳の思想」の歴史哲学的な背景に着目しながら、この哲学者によるアリストテレス読解――古代哲学のテクストの翻訳に関する具体的作業と、翻訳作業をめぐる思弁――がいかにして遂行されているかを検証した（この成果は「Metakosmesis, ou l’ontologie du monde : Martin Heidegger」および「世界像の時代における翻訳者の課題」として発表された）。

（B）哲学・文献学・言語理論の交錯する地点における「翻訳の思想」

翻訳の思想の歴史哲学的前提を確認したうえで、本研究では、19 世紀における歴史諸科学の隆盛のなかで発展した古典文献学に対し、ハイデガーをはじめとする 20 世紀の哲学がどのように応答し、文献学的な思考のポテンシャルを引き受けながら翻訳の思想を展開したかを検証した。とりわけ、本研究の重要な成果として、「リズム」概念の翻訳に関して 20 世紀に展開した様々な思想の集中的な調査をおこなった点が挙げられる。「リズム」概念は、古代ギリシアのソクラテス以前の思想家たちから現代にいたるまでほとんど翻訳されずに、すなわち、ギリシア語の原語をほぼそのまま形を変えずに受け継がれてきた概念である。しかしながら、この概念は、外見上の無翻訳を越えたところで、プラトンによる規定（音楽的な意味におけるリズム）を経て近代にいたるまで、きわめて

多様に解釈されており、もはやひとつの概念ないし語の翻訳として一貫性を保持しえないまでの顕著な肥沃さを示している。こうした多義性と流動性ゆえに、20 世紀の思想史において、「リズム」概念は、概念の翻訳ないし継受の可能性の根拠そのものをめぐる問いかけの対象となった。本研究では、ハイデガー、イェーガー、バンヴェニスト、ブランショ、レヴィナス、セール、メショニックといった哲学者、思想家、文献学者、言語学者らにおいて、「リズム」概念の翻訳が、翻訳という営為の本質、さらには言語そのものの本質を思考するうえで根本的な寄与をもたらしたことを明らかにした。

（C）翻訳の倫理的・政治的契機

他なる言語を話す「隣人」たちが存在するかぎり、翻訳という営みの実践的な必要性は存続しつづける。「翻訳の思想」はそうした隣人との共存のための倫理ないし政治の指針を提供する。以上のような倫理的・政治的契機を射程に収めるならば、たとえばハイデガーをはじめとする現代の哲学者たちにとって「ロゴス」という西洋哲学史の根本語の（再）翻訳と（再）解釈が具体的な争点となった動機が、あらためて理解されることになる。ここで問われているのは、いかにして「ロゴス」概念の翻訳を通じて、実存および共実存の条件――それはとりもなおさず翻訳をめぐる思考の条件でもある――を思考するかである。本研究では、20 世紀における「ロゴス」概念の翻訳と再解釈をめぐり、ハイデガーの 1930 年代‐40 年代にかけてのヘラクレイトス論、フランスの哲学者・文献学者であるクレマンス・ラムヌーによる『ヘラクレイトス：物と言葉のあいだの人間』（1959）を精査したうえで、両者を重要な着想限としつつ独自の仕方でロゴス概念を翻訳・解釈したブランショの議論の意義を明らかにした（「翻訳における〈意味の再現〉について：ブランショ・ベンヤミン・ハイデガー」として発表）。また、ブランショの言語論の形成においてレヴィナスの倫理思想との「対話」が重要な役割を果たしたことを再確認した。

（D）思考の課題としての翻訳

以上の研究成果を通じ、主としてハイデガー哲学の影響圏に位置づけられる 20 世紀の諸思想を貫いて「翻訳の思想」が展開していること、そしてこれが歴史哲学・文献学・言語理論の諸潮流と密接に連関していることが明らかにされた。本研究は、その総括として、アメリカ合衆国の哲学者ジョン・サリスの著書『翻訳について』の翻訳書を刊行し、これに「翻訳の思想」と西洋哲学史の関係をめぐる論考「翻訳、この錯綜するもの：ジョン・サリス『翻訳について』を読む」を併載した。本書は、英語圏で活躍する哲学者が、現代におけるコミュニケーション的言語観の根本に潜む「無翻訳の夢」をその哲学的な淵源にさかのぼって問い直すとともに、ベンヤミン、ハイデガー、ガダマー、デリダといった現代の哲学者たちが「翻訳」をめぐる思考を展開した際に賭けられていたものが何であったかを説き起こす著作である。20 世紀の哲学において西洋哲学の歴史そのものの限界が思考されるに及んで、翻訳をめぐる思弁と実践がいかにして思考そのものの課題として要請されたのか。このことが本書の翻訳および論考執筆を通じて問い直された（以上の成果に付随して、ヴァルター・ベンヤミンの翻訳論「翻訳者の使命」と、これに関してブランショが執筆した論考を対比し、両者が「意味の再現」という翻訳の規範をめぐっていかなる思考を展開しているかを検証した）。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

（１）<u>西山　達也</u>、「翻訳における〈意味の再現〉について：ブランショ・ベンヤミン・ハイデガー」『西南学院大学国際文化論集』、査読無、第 29 巻第 1 号、2014 年、47-74 頁

（２）<u>西山達也</u>、「ジョルジュ・バタイユとジャン＝リュック・ナンシーにおける「思考」の探求」『言語と文化』、査読無、法政大学言語文化センター編、第 10 巻別冊、2013 年、243-258 頁

（３）<u>西山　達也</u>、「「すべてはリズムである」：思弁的翻訳論への序説」『西南学院大学国際文化論集』、査読無、第 27 巻第 1 号、2012 年、183-216 頁

（４）<u>西山達也</u>、「ハイデガーをめぐる対談」解説、ジャック・デリダ、ドミニク・ジャニコー著、西山達也翻訳・解説、『現代思想』、査読無、第 43 巻第 2 号、2015 年、37-39 頁

〔学会発表〕（計１４件）

（１）<u>西山達也</u>、「言語と作品の生成について：『翻訳者の使命』を読むモーリス・ブランショ」、西南学院大学国際文化学会、2015 年 3 月 28 日、於西南学院大学

（２）<u>西山達也</u>、「genealogia/chronologia: ピンダロス、ニーチェ、ハイデガー」、シンポジウム「MOMENTVM CRITICVM: COLLOQVIVM IN HONOREM PROF. YASVNARI TAKADAE」（東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属　共生のための国際哲学研究センター（UTCP）　上廣共生哲学寄付研究部門　S１プロジェクト「徳と VIRTUE の比較構造論的研究」主催）、2015 年 3 月 21 日、於東京大学

（３）西山達也、「世界像の時代における翻訳者の課題：ハイデガーにおけるリズム概念の翻訳をめぐって」国際シンポジウム「ハイデガー、テオーリアと翻訳」（新潟大学人文社会・教育科学系附置　間主観的感性論研究推進センター主催）、2014 年 11 月 26 日、於新潟大学

（４）西山達也、「Ins-Werk-Setzen」、シンポジウム「ジョルジョ・アガンベンと哲学の潜勢力」（西南哲学会主催）、2014 年 6 月 21 日、於西南学院大学

（５）西山達也、「翻訳実践と言語の倫理：ヘルダーリンとプラトンを繋ぐもの」、研究発表会「ギリシアの哲学と文学」（科学研究費補助金基盤研究 B「プラトン正義論の解釈と受容に関する欧文包括研究」主催：研究代表 納富信留）、2014 年 3 月 28 日、於九州大学

（６）西山達也、「レヴィナスとプラトンの現象学的解釈：『全体性と無限』における『パイドロス』読解」、西日本哲学会第 64 回大会、2013 年 11 月 30 日、於九州産業大学

（７）西山達也、「翻訳における〈意味の再現〉について」、日本フランス語フランス文学会 2013 年度春季バタイユ・ブランショ研究会、ワークショップ「翻訳の思想、再考」、2013 年 6 月 1 日、於国際基督教大学

（８）西山達也、「ジョルジュ・バタイユとジャン=リュック・ナンシーにおける「思考」の探求」、公開シンポジウム「欲望と表現 バタイユ没後 50 年」（法政大学言語・文化センター主催）、2012 年 12 月 2 日、於法政大学

（９）西山達也、「リズムという形態：ブランショ『災厄のエクリチュール』とその周辺」、日本フランス語フランス文学会 2012 年度春季バタイユ・ブランショ研究会、2012 年 6 月 2 日、於東京大学

（１０）西山達也、「共生のための忘却とダンス――『アンティゴネー』のコロスより」、UTCP ファイナルシンポジウム 2012「カタストロフィーと共生の哲学」（グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」主催）、2012 年 3 月 5 日、於東京大学

（１１）西山達也、「Metakosmesis, ou l’ontologie du monde : Martin Heidegger」、International Workshop “La philosophie de l’histoire et le messianisme”（グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」主催）、2011 年 11 月 14 日、於東京大学

（１２）西山達也、「対話としてのリズム：エマニュエル・レヴィナスとモーリス・ブランショ」、日仏哲学会 2011 年秋季研究大会、2011 年 9 月 10 日、於大阪大学

（１３）西山達也、「リズムと実存：エマニュエル・レヴィナスの『パイドロス』読解」、シンポジウム「実存の悲劇的根拠」（科学研究費補助金基盤研究 C「古典の歪曲」主催：研究代表 古澤ゆう子）、2011 年 8 月 1 日、於一橋大学

（１４）西山達也、「怖れと憐みのリズム：ハイデガーとブランショ」、明治大学人文科学研究所総合研究『模倣と創造：日本とヨーロッパにおける文化継承の現象学』第 1 回定例会、2011 年 6 月 19 日、於明治大学

〔図書〕（計１件）

（１）西山達也、「翻訳、この錯綜するもの―ジョン・サリス『翻訳について』を読む」『翻訳について』（西山達也編訳、ジョン・サリス著 *On Translation* の翻訳の併載論文）、月曜社、2013、291-312 頁

６．研究組織

(1)研究代表者

西山　達也（　NISHIYAMA TATSUYA　）

西南学院大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：40599916

(2)研究分担者

該当者なし　（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

該当者なし　（　　）

研究者番号：